

発達障害を考える

慶應義塾大学
医学部小児科専門講師
渡辺 久子氏

— 発達障害のある子どもの育ちと子育てについて —

今日は、今まで出会った発達障害の子どもたちが、私に教えてくれたことを中心に、子どもの発達、人間の心についてのお話をしたいと思います。

カイロスの時間が心をつくる

アスペルガー症候群のA君は、海外旅行の度に私に絵ハガキをくれます。それは30年以上前、彼が大変な思いをしていたとき、私が真心込めて「大丈夫ですか」と言ったことが彼の心の忘れえぬ瞬間となり、私を彼の「良い人」リストの中に入れてくれたからですね。

A君は仕事をしていて、「ポーナスの使い方がわからない」と言うので、「旅行したら？ 外国は空気が違うよ」とすすめました。そうしたら「先生、本当に空気が違う、本当に気持ちが良い。日本の外に行く」と本当に楽しんだと帰ってきました。彼の大好きな世界は電車であり、かつ良い人間のコレクション。その二つを組み合わせた世界を彼は旅して



いく。そして、そこで良い人達に出会って良い顔で帰ってきます。彼はすごく世界が広い。こういう幸せな気持ち、幸せな思いをカイロスと言います。そしてこれが心をつくるんです。ギリシア語では時間に二種類の概念があります。一つは今が何年の何月何日の何時という皆で共有し、生活、社会を作っていく上で必要なフロノスの時間。共有できて効率が良くて、そして今や世界中で一緒に時

間ね。もう一つの時間、カイロスはその人だけの時間。その人が全身全霊で輝く、1分2分では測れない永遠の時間です。診察を続けて39年になりますが、競争主義、効率主義、そういうものが徘徊して日本を壊していったと感じています。私はよく海外で、日本文化の中には4つのSがあると話します。簡素「シンプル」、ささやか「スモール」、物静か「サイレント」。それから、ゆっくり「スロー」です。これはまた命の本質を表します。本当に命の営みは、気が遠くなるような営みです。日本には育てにくい、育ちにくい仲間がいるときの包み方が本来あった。今の日本はちょっとでもダメだったらダメという厳しさがある。

でもやっぱり、私は自分の故郷の日本をA君の言う空気の「気持ちの良い」、空気が「柔らかい」場所になりたいと思うんですね。世田谷区は是非目指して下さい。発達障害のお子さんや、重度心身症のお子さんが、

講師紹介

(社福) 嬉泉常務理事 石井 哲夫
渡辺久子先生は、慶應義塾大学医学部小児科専門講師として、学生の教育にあたり、併せて、慶應義塾大学病院小児科外来医長として診療を実践されています。

現在まで、国内外の様々な学会、あるいはその団体の責任を持たれて幅広い社会活動をされています。平成20年8月には、横浜でアジア初の、第11回世界乳幼児精神保健学会世界大会が行われ、日本組織委員会会長を務められました。また、世田谷区発達障害相談・療育センターを運営する、社会福祉法人嬉泉の活動にも長らくご協力頂き、また大変深くご理解を頂いております。そのような中で、今回この「げんき」の発達障害理解のための啓発事業にもご協力を頂きました。

へにっこり笑える社会は、私達全ての人間にとって良い社会です。この子達はカナリヤ、社会に毒っ気があるとピーピーと教えてくれます。

普通の自分、普通の感覚の大切さ

子どもは、大体3歳くらいまでの時期の身体記憶がどう貯まるかで発達が決まってしまうということがあるんですね。後輩の小児科医が福島県郡山市では絶対に震災後のトラウマの子どもは出したくないというので「今この当事者であるあなた達が一番得意ですぐ出来ることをやれ

ば良いのよ。ところでこの地域は子どもを喜ばせるのに何が得意なの？」って言ったら、「絵本」だ。外部の人の言うことを聞くのではなく、自分たちの地域にあったやり方で子どもに普通の自分、普通の感覚を取り戻すことが大事なのです。絵本の読み聞かせが始まり、そして子どもとお母さんが安心して過ごせる場所ができました。なぜ、こういうことをお話しするかというと、子どもはいつ何時何に出会うかわからない。その時に羊水のように守られる場所があるか、その配慮を一番先にしてもらえるかどうかで体験が育ちの肥やしになるか、壊すものになるかの明暗が分かれるからなんです。

良い抱き癖は、脳の発達を促す

赤ちゃんの脳みそはお豆腐のように柔らかくて、髄液の中に浮かんでいて、さらに頭蓋骨、そしてさらに羊水に包まれ、子宮の壁に包まれています。また社会が妊婦さんだと守っていく。つまり赤ちゃんの命は何重にも守られ、抱き癖が付いて生まれてくるわけです。この良い抱き癖は、何を促すかという、脳の発達を促しているんですね。

私は羊水を母性、子宮を父性だと思っっています。そして日本ほど、

父性が弱くなった国はありません。父性が母と子という柔らかい命を守る、胎児のときから安心して過ごせるような、そういう社会を作りたいのです。乳児期、思春期を通し、羊水のような温かく包むものと、しっかりと守りが必要で、母性と父性があるって、初めて命を守れるのです。

羊水のような柔らかさを包んで

問主観性のお話をしましょう。実は赤ちゃんの脳には相手の心の奥、相手の意図を見抜く力がある。一方で、お母さんの声は赤ちゃんの脳を自然に刺激するように出来ている。お母さんの「おはよう」に、阿吽の呼吸で響き合ってお互いの脳が発達していきます。

しかし、問主観性の発達不全がある広汎性発達障害の子どもは、そういうやりとりのところがすごく難しく、頑張ってもつまづいかなかって本当に疲れ果ててしまいます。厳密にはいろいろな要因が重なっている可能性もありますが、エネルギーを使い果たして二次的な障害を起こすと、育ちがだんだん逸れていってしまふ。だから、時間を充分にかけ、そしてしっかりと暖かく包むことが必要なんです。羊水のような柔らかさ、それからこの範囲でやれば大丈夫という子宮のような枠組みでやっていけ

ば、必ずどんな子どもでも伸びていきます。傷つきながらも子どもたちは乗り越えます。そして辛い事があった後にはねぎらう。辛い事があっても丸があれば良いんです。

チームワークで親を支える

現在の研究では、子どもが感じる「良い人」というのは血のつながりとも、男女、年齢とも関係ないんです。「良い人」が、親よりも保育園の先生という場合もあるでしょう。でも、子どもを一生見ていけるのはお父さんとお母さんでしょ。だから、周囲が気を付けて、「私達はこんなふうにするけれども、それはお父さんとお母さんと一緒にやっているんだよ」とチームであることを伝えていくことが大事です。そこには保育園とか地域とかも絶対に必要ですね。今、特に若い真面目なお母さん達が、周りに応援してもらえない環境がなくプレッシャーを感じてしまふ。「羊水の加減」で、いいのいいの、それでいいの、大丈夫大丈夫っていうのが、一番良い応援なんです。

発達障害の子が何を感じているかを考えながら、その子が社会で尊重され、その子らしく生きるために、本当に良い出会いのカイロスを日々心がける。それがとても大切だと思います。(終)

(文責:世田谷区発達障害相談・療育センター)

